

水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅲ

2003年3月

水見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅲ

2003年3月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くより海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

平成10年、日本海側最大の前方後方墳である柳川布尾山古墳発見は、大きなニュースとして市民に受け入れられ、改めて氷見地域の古墳時代の様子に興味が示されるようになりました。

氷見市では市内の古墳の現況を把握するため、3カ年計画で丘陵地区の分布調査を計画しました。本書はその最終年度の報告書であり、文化財保護・活用の一助となることを願っております。

終わりに、調査にあたりましてご指導・ご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

氷見市教育委員会

例　　言

1 本書は、氷見市教育委員会が国庫補助事業として3カ年計画で実施している丘陵部遺跡詳細分布調査第3

年目（平成14年度）の報告書である。

2 調査は富山県教育委員会文化財課、富山県理歴文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3 調査参加者は次の通りである。

調査担当者：大野 実（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

調査補助員：北川康介・小川卓哉・本川光久・荒原雄大・樹谷史章・小林みのり・牧野啓太郎・坂野井絵理・竹谷充生・松森智彦（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：林昭明・細田隆博（富山大学大学院人文学部考古学研究室学生）

4 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、副主幹坂木研智・主任小谷超・学芸員廣瀬直樹が事務を担当し、課長池田晃が統括した。

5 本書の編集・執筆は、大野が担当した。

6 調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

富山考古学会・氷見市史編さん室・氷見市立博物館

西井龍儀・宮田進一・高橋浩二・松島洋

目 次

序

はじめに	1
第 1 章 本年度調査地区の地勢と古墳についての研究史	3
第 2 章 対象地区における古墳の様相	4
第 3 章 測量調査の成果	16
第 4 章 氷見市における古墳の概要	22
参考文献	33
付 章 堀田ナンマイダ松古墳群 1 号墳における地中レーダ探査	34

図 目 次

第1図：調査風景	1
第2図：本年度の調査区	2
第3図：古墳分布図(1)	5
第4図：古墳分布図(2)	7
第5図：朝日長山古墳墳丘復元図	10
第6図：朝日守山 1・2号墳墳丘測量図、復元図	11
第7図：朝日渕山古墳群墳丘測量図、復元図	12
第8図：慈領コツアラ古墳群墳丘測量図、復元図	13
第9図：光西寺山 1～3号墳墳丘測量図、復元図	14
第10図：梅川布塙山古墳復元想定図	15
第11図：堀田ナンマイダ松 1号・2号墳墳丘測量図	17
第12図：堀田ナンマイダ松 1号・2号墳墳丘復元図	19
第13図：堀田ナンマイダ松古墳群周辺の地名	21
第14図：氷見市内の古墳集計図	32

図 版 目 次

図版 1 (1)堀田ナンマイダ松古墳群遠景	
(2)堀田ナンマイダ松 1号墳全景	
(3)堀田ナンマイダ松 1号墳近景	
図版 2 (1)堀田ナンマイダ松 1号墳北東側区画溝	
(2)堀田ナンマイダ松 1号墳南東側区画溝	
(3)堀田ナンマイダ松 2号墳全景	
図版 3 (1)光西寺山古墳群遠景	
(2)慈領古墳群遠景	
(3)慈領コツアラ古墳群遠景	
図版 4 (1)寺坂久保古墳群遠景	
(2)深原古墳群遠景	
(3)堀田ニキ塙山古墳群遠景	

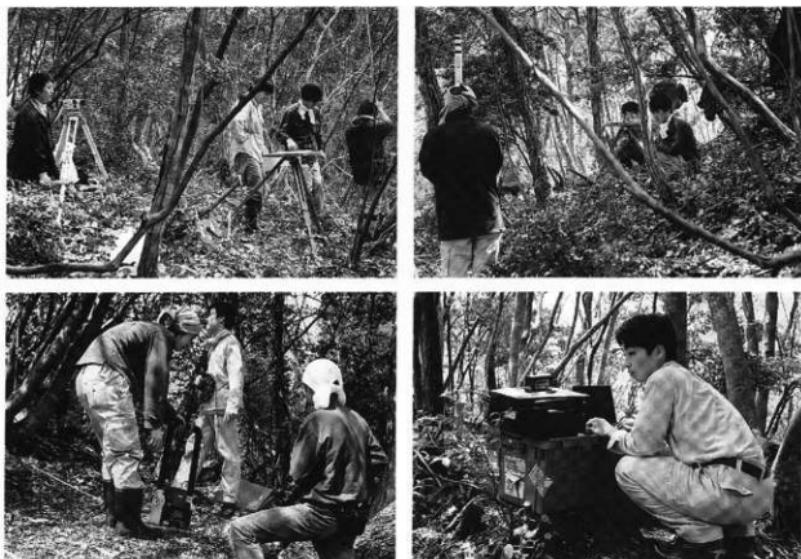
はじめに

水見市では平成10年の柳田布尾山古墳の発見以後、西井龍儀氏を中心とする水見市史編さん委員会考古部会の調査によって多数の古墳が発見され、また一部の主要な古墳の測量調査が実施された。水見市教育委員会では市史関連の調査の成果を元に、文化財保護の立場から市内の古墳の現況の把握と確認のため、丘陵地区の分布調査を平成12年度から3カ年計画で実施した。

平成12年度は市北部の宇波川・阿尾川・余川川流域の古墳群の現況を確認し、一部の古墳について測量調査を実施した。

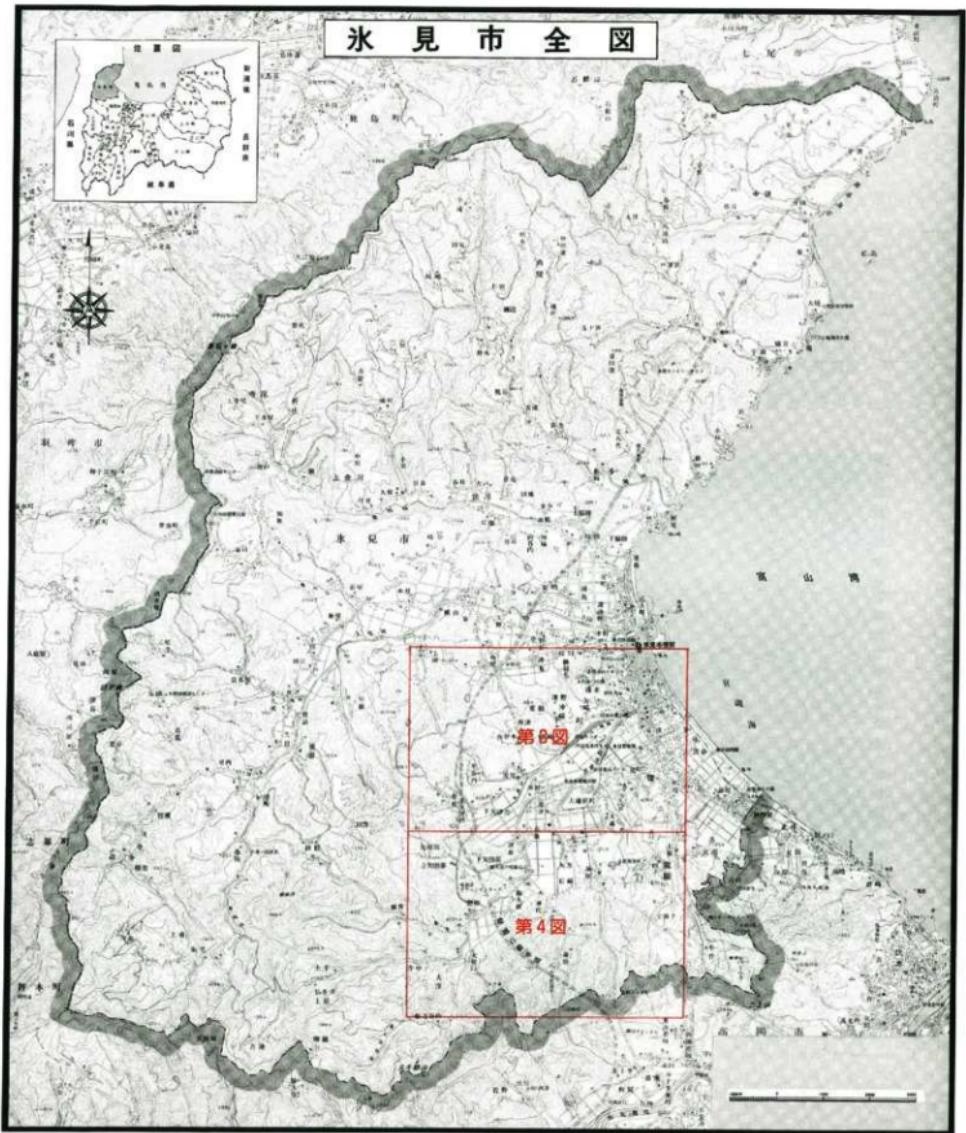
平成13年度は市中部の上庄川流の古墳群の現況を確認し、新たな古墳を発見するとともに、一部の古墳について測量調査を実施した。

最終年度にあたる本年度は、市南部の仏生寺川流域を対象地区とし、古墳群の現況確認を目的とした分布調査を実施し、一部の古墳については測量調査・レーザ探査を行った。調査は平成14年12月3日から平成15年3月18日まで断続的に実施した。



第1図 調査風景

氷見市全図



第2図 本年度の調査区

第1章 本年度調査地区の地勢と古墳についての研究史

氷見市は富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万8千人である。

市域は南・西・北の三方が標高200～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市北半部は上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。市南半部は主として布勢水海が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘から成る。

本年度の調査地区は市南部の仏生寺川流域地区である。仏生寺川は高岡市との境界近くの吉池地区を水源として、約14kmで富山湾に注ぐ河川である。支流が多くその流域は十三谷と通称されるが、下流の平野には繩文海進期以降布勢水海と呼ばれた潟湖が形成されていた。

古墳は主として布勢水海の出入口にあたる淡川左岸の丘陵上と布勢水海南側に広がる平野を見下ろす丘陵上に分布している。ここは昨年度報告の上庄川流域に次いで、氷見市で古墳の分布が濃い地域である。

本年度対象地区の古墳のうち占くからその存在が知られていたのは、朝日長山古墳と惣領古墳群である。

朝日長山古墳は昭和25年4月、氷見高校歴史クラブが土砂採取現場に石室がのぞいているの発見して、存在が知られた。そして昭和27年3月に同歴史クラブによって石室の一部分が発掘調査されている。

その後昭和44年8月に富山考古学会員の踏査によって円筒埴輪片が採集され、富山県における埴輪の初例となった。埴輪片はその後昭和46年4月にも採集されている。

さらに昭和47年9月には同クラブと市教育委員会によって、石室残存部の調査が行われた。

一方、惣領古墳群は、大正末年に土地所有者が開墾の際に石室材や須恵器・鉄刀が出上して存在が知られるようになった。

昭和38年8月には氷見高校歴史クラブによる発掘調査が行われ、埋葬主体部の砾床と鉄刀・刀子・管玉・ガラス小玉などが出土した。

墳形・規模については、当初細長い1基の古墳とみられていたが、平成7年10月の市史編さん委員会考古部会による踏査により、2基ないし3基の小円墳からなる古墳群と推定されている。

残りの古墳群は昭和50年代後半以降の分布調査によって新たに確認されたものであり、本地区は氷見市で近年最も古墳が発見され、様相が変化した地域である。

第2章 対象地区における古墳群の様相

1 朝日寺山古墳群

湊川左岸の朝日山丘陵上、標高約40mに位置し、円墳2基、方墳1基の計3基が確認されている。古墳群北側の谷は真言宗上日寺の境内にあたる。平成8年12月上日寺境内調査の折りに発見され、平成11年3月市史編さん委員会考古部会（以下、市史考古部会）によって略測が行われている。

1号墳は地形の改変が著しいが、径38~40m、高さ約7mと推定される円墳である。丘陵頂部に位置し、幅約8mの堀状造構によって尾根筋と区切られている。2号墳は一辶8m、高さ約1mの方墳である。3号墳は直径10m、高さ約1.5mの円墳である。

1号墳北側の斜面は、上日寺に出来する中世墓が確認されており、古墳周辺でも珠洲藏骨器が出土している。また、1号墳北側には現在も五輪塔が残されている。従って、上日寺の墓地として、中世から改変されていたと考えられる。ただ、本古墳群は広義にみれば朝日長山古墳と一連のものと考えられ、その立地から朝日長山古墳より先行する可能性が高い。古墳時代の中期の大型円墳ととらえられよう。

2 朝日長山古墳

湊川左岸の朝日山丘陵上、標高約20mに位置する。朝日寺山古墳群に連なる丘陵尾根に立地している。昭和25年4月、土砂採取場の斜面に石室が露出しているのが確認され、周知された。昭和27年に水見高校歴史クラブが石室の一部を発掘調査している。昭和44・46年には富山考古学員の踏査で埴輪片が採集され、昭和47年9月には水見市教委・水見高校歴史クラブによって石室残り部分が発掘調査された。

墳形・規模については水見高校歴史クラブの図面を元に、藤山富士夫氏によって全長約43mの前方後円墳との説が示されている。

石室内出土遺物では、鉄刀5・刀子2・短剣1・矛1・鉄錐約50・鉄環1・杏葉2・冠帽片・鞍金具1・胡禄金具片・管玉2・丸正6・須恵器（杯蓋6・杯身7・高杯1・器台1・壺蓋1・短頸壺1・台付壺）・土師器（杯6・盤5・壺2）がある。墳丘からは須恵器壺1と埴輪破片が出土している。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪がある。

遺物出土状況から追葬の可能性があり、石室は堅穴系横穴式石室と推定される。古墳築造時期は6世紀前半である。

3 朝日漏山古墳群

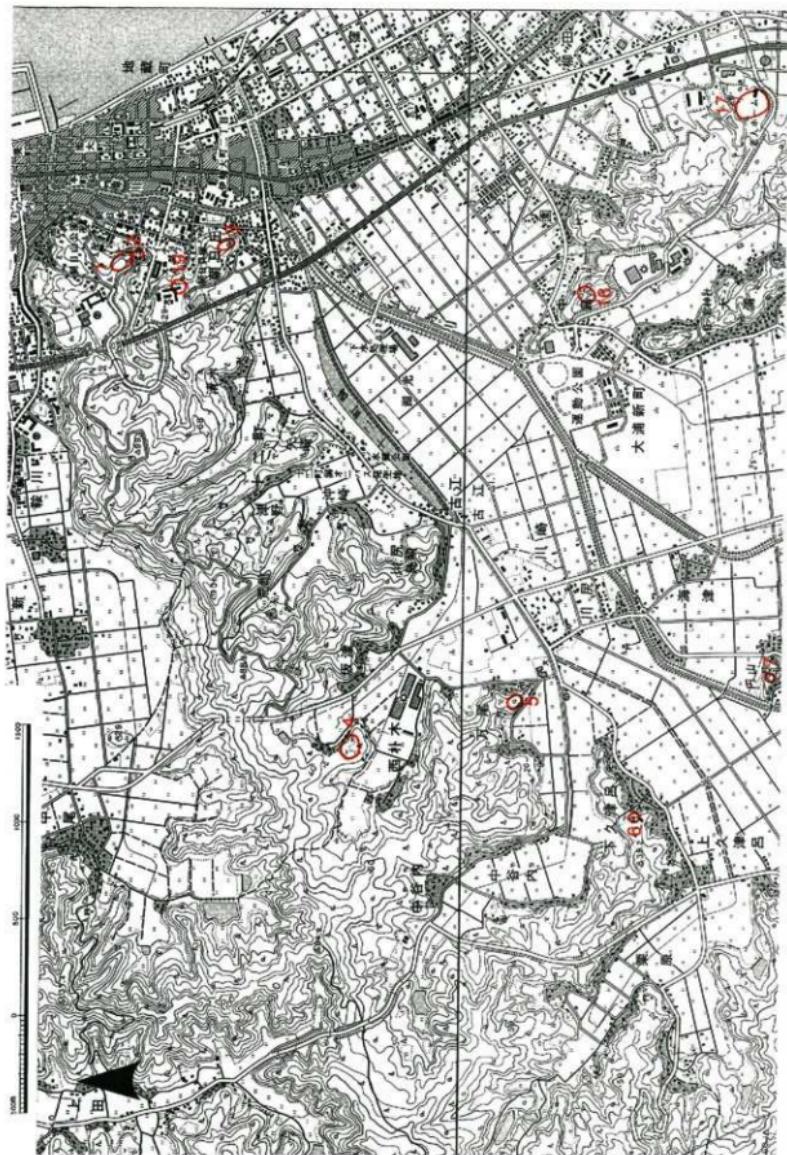
湊川左岸の朝日山丘陵上、標高約25mに位置し、前方後円墳1基、方墳1基の計2基が確認されている。古墳東側の丘陵斜面には国指定史跡朝日貝塚が所在する。昭和56年6月に西井龍儀氏が発見し、平成5年3月市教委が測量調査を実施している。

1号墳は発見・測量当初は前方後方墳と考えられたが、その後前方後円墳と推定され、時期も採集遺物から5世紀後半以降の可能性がある。全長34m、前方部長14m、後円部径20m、前方部幅16.5m、くびれ部幅9.5m、前方部高1.8m、後円部高2.2mである。

2号墳は1号墳の南側に所在し、14×12mの方墳である。高さは約1mである。

4 西朴木古墳群

万尾川支流坂津川右岸の丘陵上、標高約25mに位置し、円墳3基からなる。平成13年3月、市史考



第3図 古墳分布図(1) 1:25000

古部会の調査で確認された。

1号墳は丘陵尾根頂部に築かれ、直徑14m、高さ約1～2mである。2号墳は直徑10.5m、高さ約1.3m、3号墳は直徑10m、高さ約1.5mであるが、両者とも北側が崖崩れで崩壊している。古墳時代中期から後期の古墳群であろう。

5 万尾古墳

万尾川左岸の丘陵上、標高約30mに位置する。平成7年、林寺巖州氏によって確認された。畠地として開墾されているため、かなり形状が改変されているが、全長約40mの前方後方墳の可能性がある。前期の築造か。

6 下久津呂古墳

仏生寺川左岸の丘陵上、標高26mに位置する。平成13年1月の市史考古部会による踏査で発見された。13.5×11.5m、高さ約2mの方墳である。古墳時代前期のものか。

7 布施円山古墳

仏生寺川右岸の独立丘陵上、標高約25mに位置する。古墳の所在する独立丘陵は、「布勢の円山」と呼ばれ、頂部には大伴家持を祀った布施神社がある。古墳はここからやや西へ下った尾根に築かれた単独墳であるが、神社の敷地に主墳があつた可能性も残る。

古墳は直徑6m、高さ約1.5mの円墳である。

8 深原古墳群

仏生寺川左岸の丘陵上、標高20～40mに位置し、円墳8基、方墳1基の計9基からなる。平成6年12月の市史考古部会による分布調査によって発見された。

1～6号墳は仏生寺川に沿った南向きの尾根に一列に並ぶ円墳である。低位から順に1号墳は直徑7m、高さ約0.8mであり、2号墳は直徑9.5m、高さ約1.5mである。3号墳は群中最大規模で直徑13m、高さ約2mである。4号墳は直徑6m、高さ0.6mであるが、自然地形の可能性がある。5号墳は直徑8m、高さ約1.2mであり、6号墳は直徑8m、高さ約1mであるが、尾根道により墳丘西側を欠く。7号墳は丘陵頂部に位置し、直徑6m、高さ約0.6mの円墳であるが、自然地形の可能性も残す。8号墳は丘陵北側尾根に位置する直徑6.5m、高さ約0.5mの円墳である。9号墳は丘陵南側の緩斜面に位置する方墳であり、一边6.5m、高さ約0.5mであるが、中世の遺構の可能性もある。

古墳群の時期は古墳時代中期から後期と推定される。

9 寺飯久保古墳群

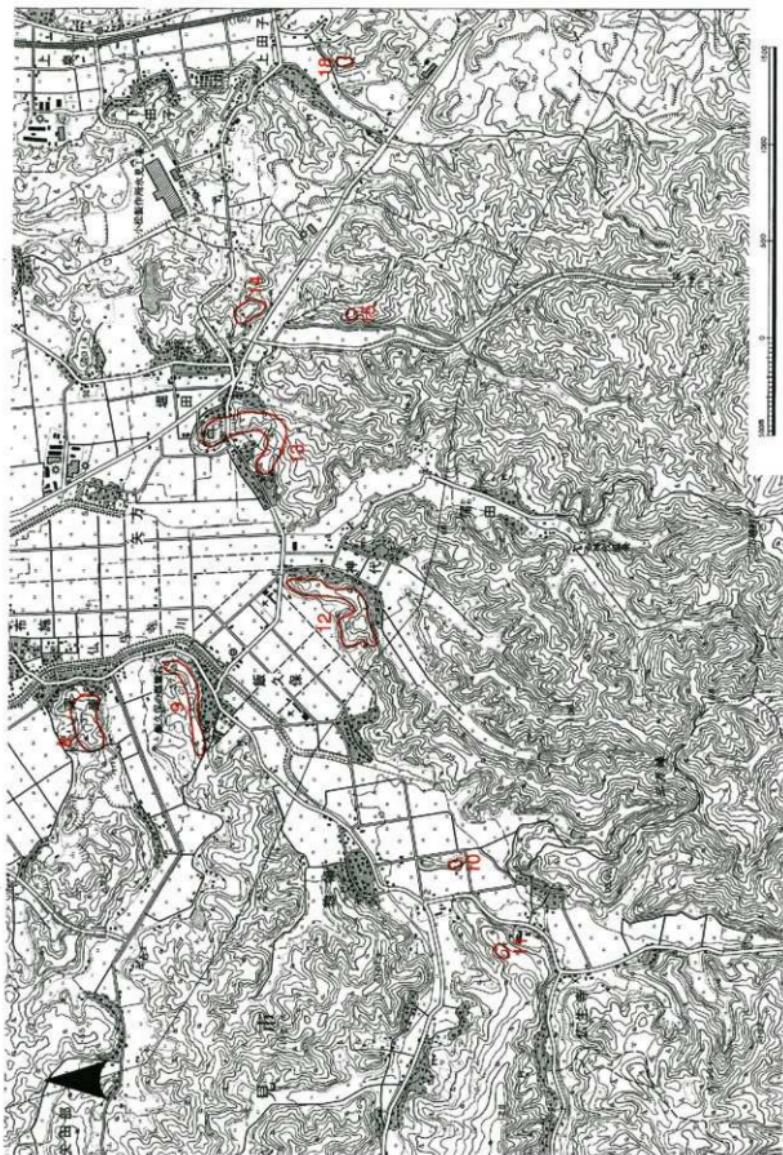
仏生寺川左岸の丘陵上、標高35～47mに位置し、円墳6基からなる。平成6年12月、市史考古部会による分布調査で発見された。東支群と西支群からなる。

東支群は1～3号墳である。1号墳は直徑17m、高さ約2.5m、2号墳は直徑9m、高さ約1m、3号墳は直徑6.5m、高さ0.5mである。西支群は4～6号墳である。4号墳は直徑13m、高さ1.5m、5号墳は直徑7m、高さ1.2m、6号墳は直徑5m、高さ約0.6mである。5号墳の上には墓碑が建っており、西支群は後世の墳墓の可能性もある。

古墳群の時期は古墳時代中期から後期と推定される。

10 慈領古墳群

仏生寺川と鞍骨川に挟まれた平野に所在する独立丘陵上、標高約20mに位置し、円墳3基からなる。大正時代末頃開墾によって遺物が出土し、周知された。昭和38年に氷見高校歴史クラブによる発掘調



第4図 古墳分布図(2) 1:25000

査が実施されている。

発掘調査では主体部の礎床が確認され、須恵器・鉄刀・刀子・菅笠・ガラス小玉などが出土している。当初単独古墳とみられたが、平成7年市史考古部会による踏査で、小型円墳からなる古墳群と推定されている。時期は6世紀後半である。

11 惣領コツデラ古墳群

仏生寺川左岸の丘陵上、標高約60mに位置し、円墳2基からなる。平成7年10月に市史考古部会の分布調査で発見され、平成8年3月に略測、平成13年7月に測量調査が実施された。

1号墳は直径16m、高さ約1.5mの円墳で幅約2.5mの周溝をもつ。2号墳は直径16m、高さ約2mの円墳で、幅約1mの周溝をもつ。古墳時代中期の築造と推定される。

12 光西寺山古墳群

仏生寺川右岸の丘陵上、標高30~65mに位置し、前方後円墳1基、円墳17基、方墳6基の計24基からなる。主要な古墳は古くから地元で知られていたが、平成元年山岸太一氏の案内で市立博物館による踏査が行われ、円墳11基からなる古墳群として認識された。その後、平成12年の市史考古部会による分布調査で古墳が追加され、A~Dの4つの支群からなる計24基の古墳群となった。このうち1~3号墳の測量調査が同12年9~10月、市史考古部会によって実施されている。

A支群は丘陵最北端に位置し、7基の古墳から成る。1号墳は地元では古くから「一の塚」と呼ばれているもので、全長29.5m、高さ約3m、前方後円墳もしくは帆立貝形古墳と思われる。2~7号墳は円墳である。2号墳は直径11m、高さ約2.4m、3号墳は直径10m、高さ約1.6m、4号墳は直径11m、高さ約1.2m、5号墳は直径9m、高さ約1.2m、6号墳は直径8.5m、高さ約0.8m、7号墳は直径5m、高さ約0.9mである。

B支群は8~9号墳から成り、いずれも方墳である。8号墳は12.5×9.5m、高さ約0.8m、9号墳は一辺9m、高さ約0.6m、10号墳は11×9.5m、高さ約0.8mである。

C支群は11~18号墳から成る。11号墳は10×8m、高さ約1mの方墳である。12号墳は直径17m、高さ約2mの円墳であり、北西裾にテラスをもつ。13号墳は13×10m、高さ約2.5m、14号墳は21×20、高さ約2.5mであり、共に方墳である。15号墳は直径13m、高さ約1.5mの円墳、16号墳は直径7m、高さ約0.8mの円墳であるが自然地形の可能性もある。17号墳は直径16m、高さ約1.5mの円墳、18号墳は直径9m、高さ約1mの円墳であり、幅約2mの周溝をもつ。

D支群は19~24号墳から成り、いずれも円墳である。19号墳は直径15.5m、高さ約2m、20号墳は直径9m、高さ約0.8m、21号墳は直径11m、高さ約2m、22号墳は直径9.5m、高さ約1.8m、23号墳は直径14m、高さ約2.5m、24号墳は直径10.5m、高さ約1mである。19~21~23号墳は周溝をもつ。

本古墳群は布勢水海周辺で最も数の多い古墳群であり、時期は1号墳を含めて古墳時代中期から後期のものと推定される。

13 堀田二牛塚山古墳群

神代川右岸の丘陵上、標高30~45mに位置し、A~Cの3つの支群からなり、円墳4基、方墳2基の計6基と推定される。A支群は未調査のまま消滅した。B・C支群は平成元年山岸太一氏の案内で市立博物館が踏査を行い発見し、その後平成12年3月と同13年3月に市史考古部会による踏査で古墳が追加された。

A支群は一辺20m、高さ約2mの方墳であるA1号墳と、一辺約8mの方墳であるA2号墳の2基

があったとされる。B支群は直径約35m、高さ約4.5mの円墳であるB1号墳と、直径6.3m、高さ約0.8mの円墳であるB2号墳、直径6.5m、高さ約1mの円墳であるB3号墳からなる。C支群は直径7m、高さ約0.6mの円墳であるC1号墳が確認されている。B1号墳は古墳時代中期、残りの円墳は古墳時代後期の築造と推定される。A支群は古墳時代初めのものか。

14 堀田ナンマイダ松古墳群

第3章に詳述。

15 堀田館ノ山古墳

堀田集落南東の丘陵上、標高約60mに位置する。昭和63年山岸太一氏の案内で市立博物館が踏査を行い発見した。当初は中世の塚と考えられたが、周溝があることから、古墳の可能性が指摘されている。直径7m、高さ約1.2mであり、幅約1.5mの周溝をもつ。

16 大浦三藏古墳群

仏生寺川右岸の丘陵上、標高約37mに位置し、円墳2基からなる。平成10年12月、林寺巖州氏によって確認された。尾根を横切る山道に沿って築かれている。

1号墳は直径12m、高さ約2.5m、2号墳は直径8m、高さ約2mである。

17 柳田布尾山古墳

小竹川左岸の丘陵上、標高25mに位置し、前方後方墳1基と円墳1基からなる。平成10年6月西井龍儀氏の踏査で発見された。平成10~12年度、市教育委員会が発掘調査を実施し、平成13年1月国指定史跡になった。

柳田布尾山古墳は全長107.5m、後方部長54m、後方部幅53m、後方部高さ10m、くびれ部幅30m、前方部長53.5m、前方部幅49m、前方部高さ6mである。埴輪・葺石はないが、テラス幅の狭い段築によって墳丘全体が2段になっていたと考えられる。前方部断面幅5~18m、深さ1.2から2.3mの周濠があげられ、前方部東側コーナーには陸橋がある。墳丘は地山を削り出し、その上に盛土をして築かれている。盛土の厚さは前方部で約4m、後方部で約7mであり、古墳総体積に占める盛土の割合は約60%である。埋葬施設は盜掘によって大半が失われているが、後方部やや東寄りに主軸とほぼ平行する枯木構があった。石室の構築はない。土層の観察から墳丘の築造と内部施設構築、遺体の埋葬が一連のものとして行われた構築墓壙と考えられる。

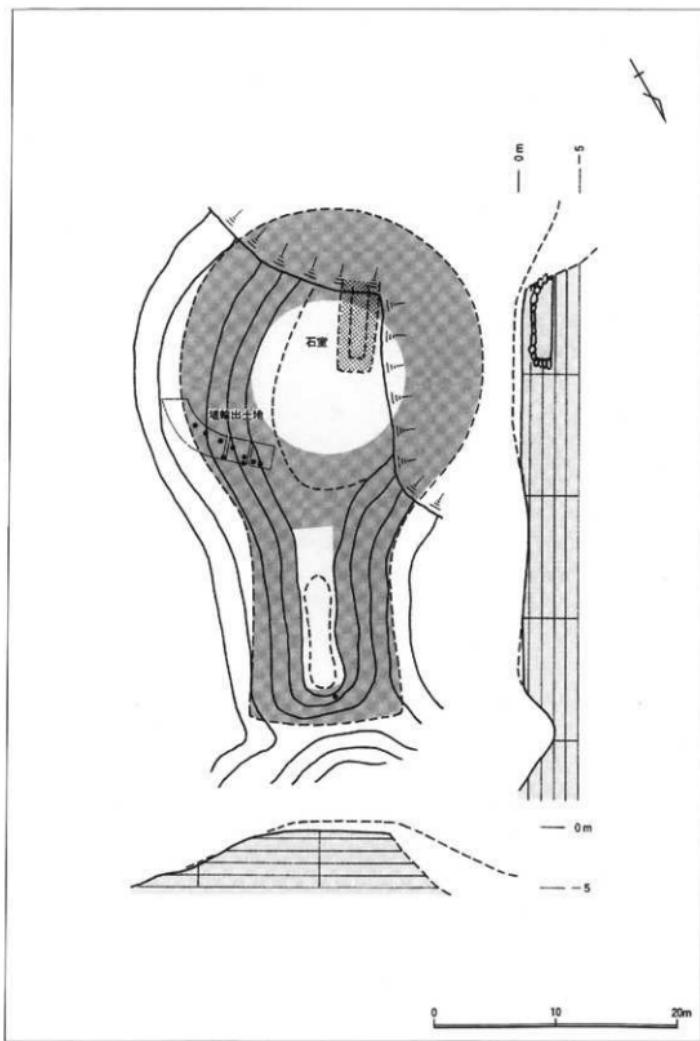
2号墳は直径25m、高さ約4mの円墳であり、柳田布尾山古墳との間に幅約5m、深さ約1.6mの周濠をもつ。

古墳時代前期前半の築造と考えられる。2号墳はこれに先行する可能性がある。

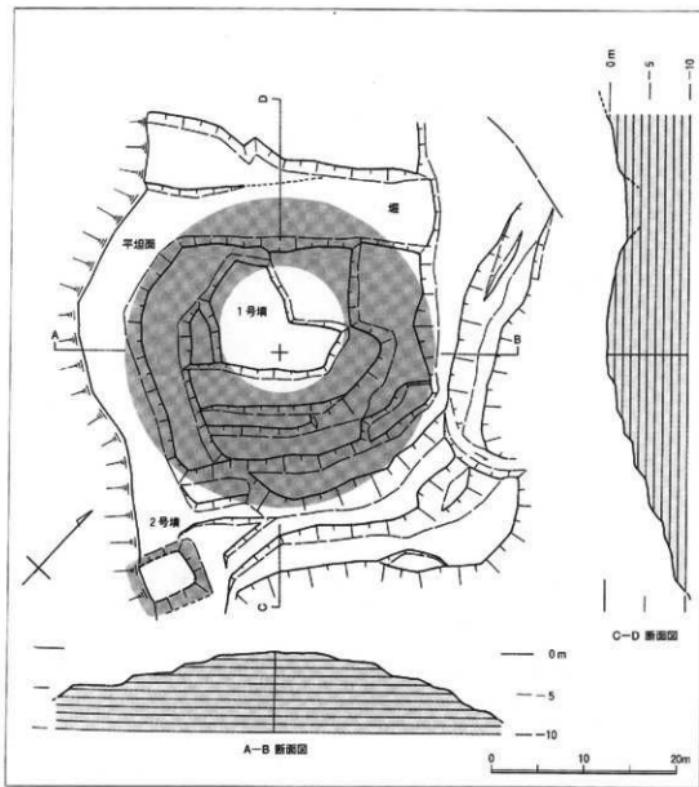
18 上田子古墳群

小竹川の流れる谷中央の丘陵上、標高約66mに位置し、方墳2基からなる。平成10年林寺巖州氏の踏査で発見された。

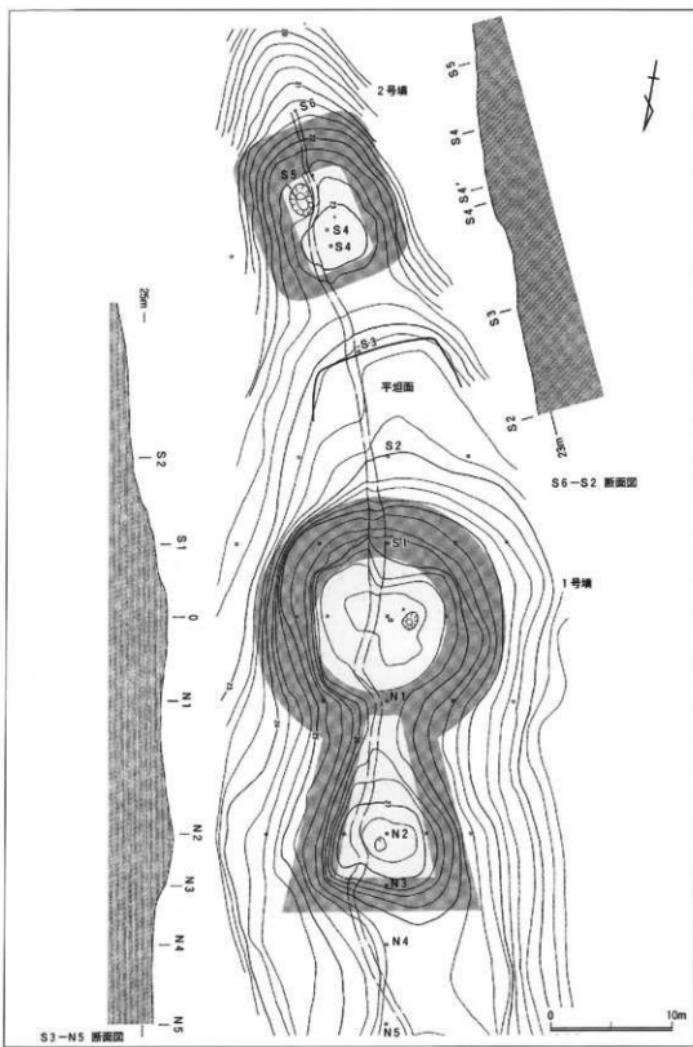
1号墳は10×8m、高さ約1m、2号墳は9×8m、高さ約0.9mである。古墳時代前期の可能性がある。



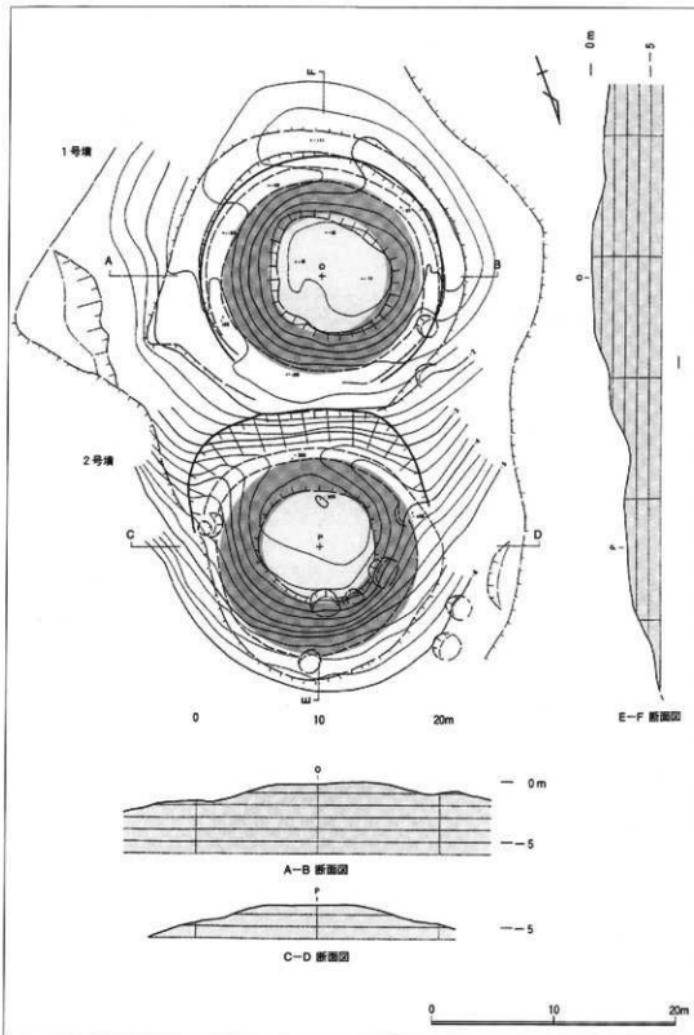
第5図 朝日長山古墳墳丘復元図（1／400）〔冰見市2002より〕



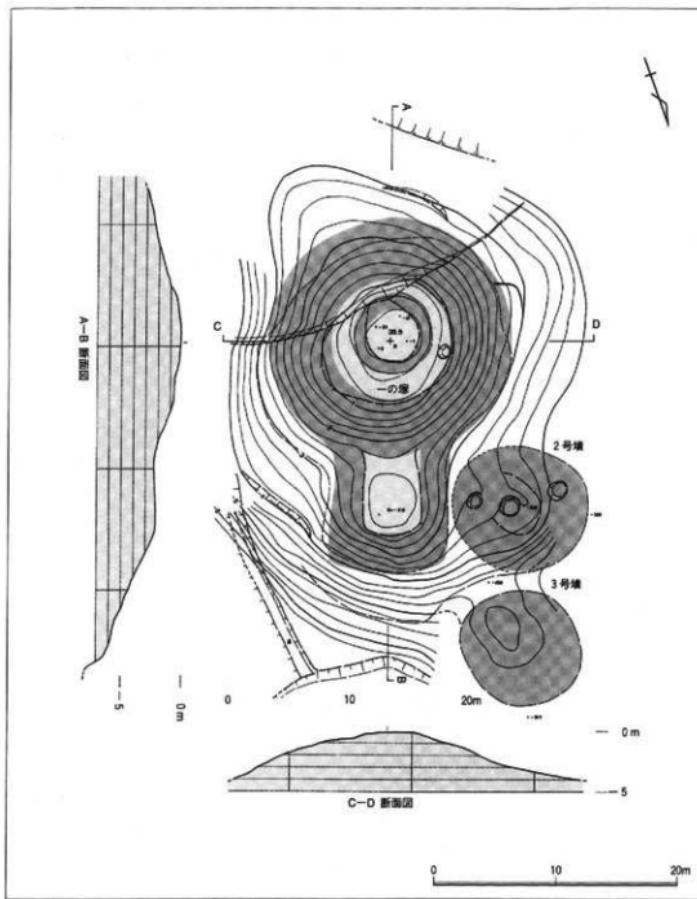
第6図 朝日寺山1・2号墳墳丘測量図、復元図（1/600）(水見市2002より)



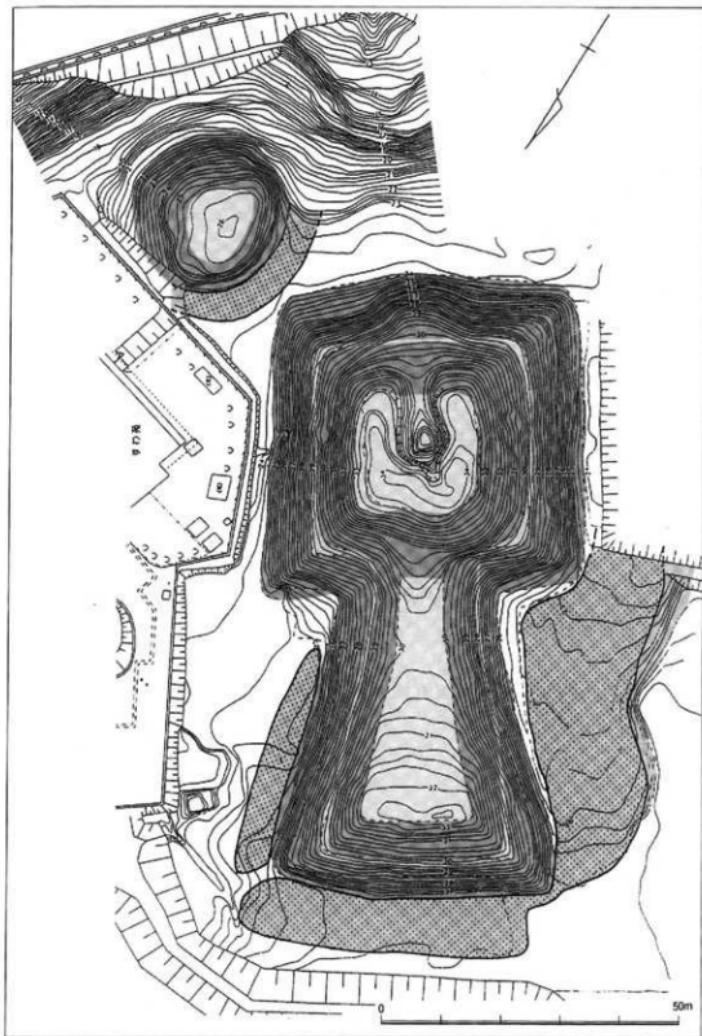
第7図 朝日洞山古墳群填丘測量図、復元図（1/400）（冰見市2002より）



第8図 惣領コツデラ古墳群墳丘測量図、復元図（1／400）（氷見市2002より）



第9図 光西寺山1～3号墳墳丘測量図、復元図（1／400）〔氷見市2002より〕



第10図 柳田布尾山古墳復元想定図（氷見市2002より）

第3章 測量調査の成果

本年度は堀田地内に所在する堀山ナンマイダ松古墳群のうち、1・2号墳の測量調査を実施するとともに、1号墳については富山大学理学部の協力を得て、レーダ探査を行った。なお、レーダ探査の詳しい成果については、巻末に報告を掲載した。

堀田ナンマイダ松古墳群は、十三平野の南東奥の谷を臨む丘陵の南西端に立地し、標高は約45m、平野との比高は約30mである。

古墳群のうち1号墳は、「ナンマイダ松」という通称の通り、古くから地元で墓の伝承地として知られてきた。また、古墳が所在するあたりの小字は「藤塚」であり、塚としても地形が認識されていたようだ。

昭和55年11月に、地元山岸太一氏の案内で市立博物館による踏査が行われ、埋蔵文化財包蔵地として認識された。その後水見市史編さん委員会考古部会による分布調査によって新たに2~4号墳が追加確認され、4基からなる古墳群と推定されている。

1号墳は方形3段築成の墳丘であり、古墳もしくは中世の段塔と推定してきた。1号墳が古墳とすれば、その形状から後期もしくは終末期の築造と考えられ、市内でもあまり例のない大規模な方墳となる可能性がある。そこで隣接する2号墳とともに測量調査を実施し、基礎的なデータを得ることとした。

なお、3号墳は丘陵の南東端にある円墳で、直径約8m、高さ約1.2m、4号墳は1号墳北側の丘陵端にある円墳で、直径約6m、高さ約0.8mである。

測量は上田子地区にある三角点から基準レベルを移し、縮尺百分の一、等高線間隔25cmの平面図と各古墳2方向の断面図を作成した。

1号墳

1号墳は標高約46mの台地の南西側に寄せて築かれた方墳であり、四隅がほぼ東西南北を向く。北東側と南東側に周濠とみられる区画溝があり、南西側は尾根斜面に連続する。北西側には山道が通っている。現状では3段築成であるが、南西側の段はいずれもあいまいである。

区画溝は、北東側が幅約4m、底幅約0.8mであるのに対し、南東側は幅約6m、底幅3~4mで断面が台形を呈する。北東側の方が山状をとどめていると考えられ、南東側は後世に改変され、全体的に拡幅された可能性がある。したがって墳丘南東側ラインは、北東側の溝の形状を参考にして大きめにとった。

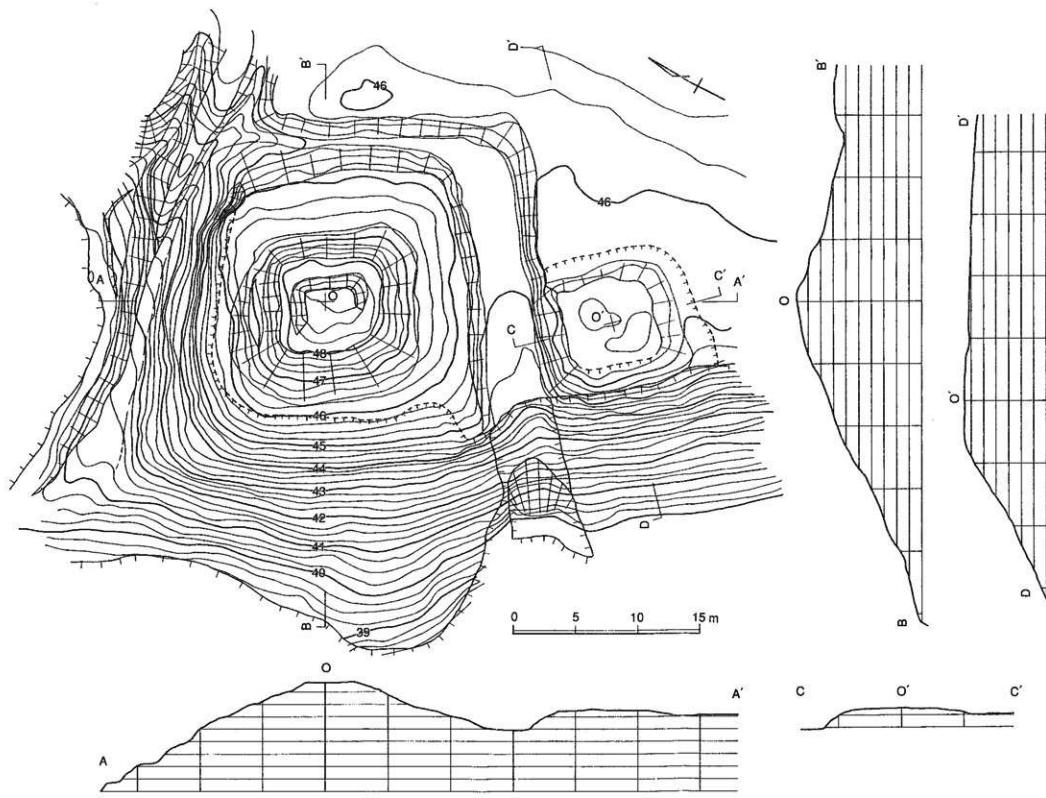
墳丘の西隅は比較的残りが良く樹も明確であり、墳丘南西側ラインはこの樹延長の傾斜変換点に設定した。

墳丘北西側は山道によって斜めに削平されており、墳丘北隅の裾は西側と北東側溝底ラインの延長の交点に設定した。

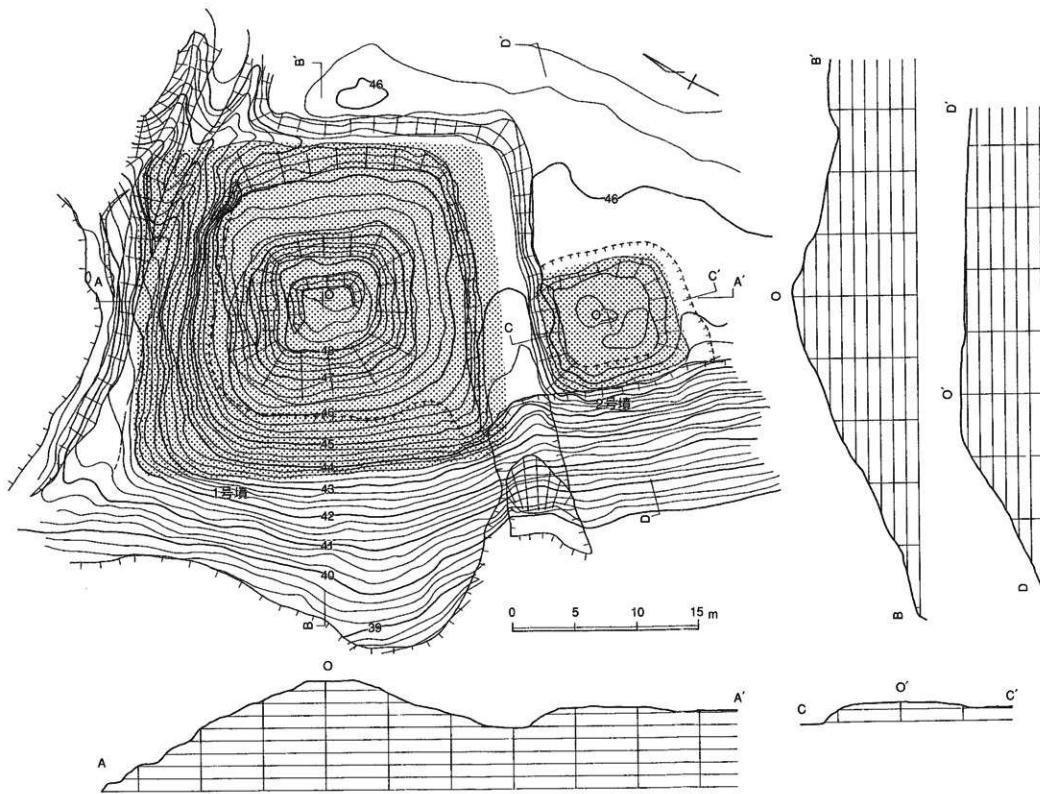
これらの結果から、1号墳は南北長28.5m、東西長26mの規模であり、溝底からの高さは約4m、西側からの高さは7mと推定される。

2号墳

2号墳は1号墳の南東側溝に接して築かれており、主軸は1号墳より約15度西へ振る。南北約10.5



第11図 堀田ナンマイダ松古墳群測量図 (1 : 300) 方位は磁北



第11図 堀田ナンマイタ松古墳群復元図（1：300）方位は磁北

m、東西約10.0mの低平な方墳であり、1号墳と同様に北東側と南東側に区画溝を設けるが、幅約1.2m、深さ約0.1mの浅いものである。墳丘頂部は7m四方の平坦面である。

まとめ

本古墳群の立地は、平野からやや谷に入った丘陵上にあたる。しかし1号墳の墳丘上からは万尾・下久津呂地区までの十三平野を見通すことができ、眺望がすぐれている。また谷をはさんだ丘陵上には堀田ニキ塚山古墳群が所在し、その谷には7世紀末から8世紀の遺物が出土した堀田大久前遺跡がある。こうしたことから古墳時代においてもそれなりの生産基盤があったと考えられ、本遺跡は本来古墳として築造されたものであろう。

古墳とすれば、終末期の古墳として横穴式石室を構築している可能性も考えられ、その手がかりをつかむ目的でレーダ探査を実施したが、石室については明確な反応を得られなかった。しかし墳丘中央部で異常反応が認められ、ここに埋葬施設が遺存する可能性も想定された。

将来的には発掘調査による確認が必要ではあるが、今回の調査の結果により1号墳については後期古墳と考えておきたい。

なお、南東側の区画溝が拡幅された時期は不明であるが、可能性とすれば中世ではないかと考えられ、古墳についても何らかの利用や改変があったと考えられる。2号墳も中世に建物の基壇として使用された可能性があろう。



第13図 堀田ナンマイダ松古墳群周辺の地名(1:10000)(氷見市教委1988)より

第4章 氷見市における古墳の概要

3ヶ年にわたった丘陵地区的分布調査が終了した。調査では古墳のす地に適していると考えられる丘陵上を踏査し、既知の古墳の再確認を行うと共に、新たな古墳の発見に努めた。また、一部の主要な古墳については測量調査等を実施し、より詳しいデータの集積を行った。むろん未知の古墳や既に消滅した古墳の存在が予測され、また今後の発掘調査等によりデータの修正が必要となる古墳もあるだろう。しかし分布調査によって市内に所在する古墳の様相は、かなり明確になったと考えたい。本章ではこれら古墳の基礎データを集積・処理することにより、氷見市における古墳の大まかな傾向や特徴を抽出し、3ヶ年の調査のまとめとしたい。

a：立地による分類

分布調査の結果、氷見市における古墳の総数は69群389基になった（単独墳も1群とする）。これらの古墳をまず立地によって分類したい。

立地による分類については、「氷見市史」7資料編五考古（以下、市史考古編とする）で採用されたように、水系ごとに分類するのが最も妥当と考える。市史考古編では各時代の遺跡も含める都合上、北から灘浦地区・阿尾川流域・余川川流域・上庄川流域・仏生寺川流域の5つに分類されたが、ここでは古墳時代の地形環境を取り入れて、新たな地区分けを行いたい。なお、古墳時代の地形環境については、「氷見市史」9資料編七自然環境（以下、市史自然環境編とする）第1章地形と地質、3. 氷見の土地の生き立ちの項を参照した。

まず、上庄川下流左岸、現在の加納地区の平野には、弥生時代から古代にかけて湯湖が所在したと推定される。この湯湖については正式な名称がないため、ここでは仮称として「加納湯」と呼ぶことにする。市史自然環境編では加納湯の範囲を南北約1km、東西約0.5kmと推定している。なお、市史自然環境編のこの項の執筆を担当された松島洋氏によると、現市街地から阿尾にかけての海岸部は、加納湯を閉じ込めた砂嘴と考えられ、可能性とすれば湯の範囲はさらに北に広がり、余川川下流域を含んでいた可能性も考えられるとのことである。従ってこの湯湖を臨む丘陵上に所在する古墳については、上庄川・余川川水系から独立させて考えることにしたい。

次に、市史考古編で仏生寺川流域とした地域にも、古墳時代においては布勢湖（布勢水海とも）という湯湖が広がっていた。当時の布勢湖は東西3km、南北2kmの範囲と推定される。市史考古編で仏生寺川流域とした朝日山丘陵の古墳は、布勢湖よりも富山湾を臨む立地と考え、独立したブロックとする。さらに、小竹川流域の古墳は布勢湖東辺を臨むとはいえ、他の古墳とは谷を違えており、別な立地条件と考えたい。

また灘浦地区的古墳は全て宇波川流域に立地しているため、同川流域とする。

以上の観点から、氷見市の古墳を、1. 宇波川流域、2. 阿尾川流域、3. 余川川流域、4. 加納湯周辺、5. 上庄川流域、6. 朝日山丘陵、7. 布勢湖周辺、8. 小竹川流域の8つのブロックに分類する。

b：各ブロックの概要

1. 宇波川流域ブロック

宇波川は石川県鹿島町の石動山(564m)の南斜面を水源とし、約9.5kmで富山湾に注ぐ河川である。白川地区から河口までの約2kmの部分で左岸に平野が形成されており、宇波古墳群を除いて、古墳はこ

の平野を臨む左岸丘陵上に築かれている。確認されているのは円墳13基、方墳1基の計14基である。

本ブロックで発掘が行われた古墳は宇波1号墳（宇波古墳）のみである。明治33年宇波神社本殿改築に伴い、石室内から鉄刀・須恵器が出土しており、6世紀後半の築造と考えられる。それ以降は宇波川対岸の脇方に横穴群が當まれている。

一方、大型の円墳3基からなる宇波安居寺古墳群は、墳頂部平坦面が大きく低平な墳丘であることから、中期の古墳と推定される。また、熊野神社2号墳は丘陵最高所に位置し、墳頂部平坦面が広い長方墳であることから前期古墳の可能性がある。

これらの見方が正しければ、本ブロックは中流から下流に向けて古墳が築かれたことになる。

2. 阿尾川流域ブロック

阿尾川は水見市最高峰の石場山（513m）を水源とし、約11.5kmで富山湾に注ぐ河川である。吉光地区から河口までの約4kmの部分で平野が形成されており、古墳は中流域の平野を見下ろす丘陵上に築かれている。円墳15基、方墳15基、前方後円墳2基の計32基からなる。

本ブロックで発掘が行われているのは昭和24年に調査され、礫床の主体部から鉄刀・菅玉の出土した指崎向川13号墳のみである。この古墳は出土遺物から6世紀中頃の築造と考えられる。可能性とすれば、指崎7号墳や北八代中川古墳のように前期の可能性がある古墳が存在するが、現段階では中期から後期主体のブロックと考えたい。

3. 余川川流域ブロック

余川川は森石ヶ峰近くの県境尾根を水源とし、約13.5kmで富山湾に注ぐ河川である。なお前述の仮称加納潟は、余川川下流地域にまで広がっていた可能性があり、そうすると余川川は加納潟に流れ込んでいたことになる。従って、本地区的古墳は中流域の古墳のみとし、下流域の古墳は加納潟周辺のブロックとした。円墳13基、方墳10基、前方後方墳1基の計24基からなる。

本ブロックで発掘調査の行われた古墳はない。立地や墳形などの表面観察からすれば、余川金谷1～3号墳は弥生時代末から古墳時代初頭、同4～11号墳は前期、12～19号墳は後期と推定される。一方、余川田地古墳群は中期の築造と推定され、両古墳群を合わせると、本ブロックは継続して古墳が築かれたと考えられる。

4. 加納潟周辺ブロック

仮称加納潟は上庄川下流左岸に広がっていたと考えられる潟湖である。前述のとおり推定される大きさは南北約1km、東西約0.5kmであり、北端がさらに広がり余川川も流れ込んでいた可能性がある。従って余川川と上庄川の下流平野を見下ろす丘陵上に築かれた古墳を加納潟周辺のブロックとして扱う。円墳25基、方墳27基、前方後円墳5基、前方後方墳3基、帆立貝形古墳2基の計62基からなる。

本ブロックで発掘調査が行われているのは、富山大学により現在調査が継続されている阿尾島田A1号墳のみである。同古墳は今のところ全長71m、県内最大の前方後円墳で、古墳時代前期前半の築造と推定されている。

阿尾島田古墳群にはこの他中期と推定される大型の円墳が数基あり、また谷をへだてた稲積オオヤチ古墳群には全長約47mの帆立貝形古墳であるA1号墳や、小型の前方後方墳であるA7号墳が所在する。古墳時代初頭と推定される稲積ウシロ古墳群を合わせて、加納潟北側には前期から中期にかけて多くの古墳が築かれ、しかも地域では大型の古墳が集中している。

一方、加納潟西側に位置する加納蛭子山古墳群は、古墳時代初頭から後期と推定される古墳が継続

して築造されており、さらに丘陵斜面には88基以上と推定される加納横穴群が造営されている。

本ブロックには前方後円墳・前方後方墳・帆立貝形古墳といった特徴的な古墳が集中しているのが特徴である。

5. 上庄川流域ブロック

上庄川は市南西端の大釜山(502m)を水源とし、約22kmで富山湾に注ぐ河川であるが、古墳時代においては仮称加納潟に流れ込んでいたとみられる。従って下流部分の古墳は加納潟周辺のブロックとして別にした。触坂地区から下流へ向けて約10kmにわたって平野が形成されており、古墳はこの平野を見下ろす丘陵上に築かれている。円墳122基、方墳51基、前方後円墳4基、前方後方墳3基の計183基からなる。

本ブロックで発掘調査された古墳としては、まずイヨダノヤマ3号墳があげられる。直径約20mの円墳であり、鉄刀・鉄矛・鉄鎌・短甲・須恵器・土師器が出上り、中期後半の築造である。この他では既前に泉9号墳(鶴塚)と泉17号墳(鶴塚)が発掘されており、出土遺物から前者は後期、後者は中期の古墳と考えられる。

本ブロックは氷見市で最も古墳が多い地域であり、分布の状況からさらに中尾周辺、泉周辺、柿谷周辺、上山周辺、田江・小久米周辺、触坂周辺の6つに細分できよう。細分したそれぞれの区域で前期から後期までほぼ継続して古墳が築かれたと推定される。

6. 朝日山丘陵ブロック

朝日山は市街地西側にある丘陵の総称であり、この丘陵の東端の尾根上に古墳が築かれている。円墳3基、方墳2基、前方後円墳2基の計7基からなる。

本ブロックで発掘調査された古墳は6世紀初め頃築造の朝日長山古墳である。全長約43mの前方後円墳と推定され、横穴系の石室と埴輪をもつ。冠帽・玉類・鉄刀・鉄劍・刀子・鉄鎌・胡祿金具・馬具・須恵器・土師器が出上している。

朝日長山古墳と同一の丘陵には朝日寺山古墳群が所在し、1号墳は朝日長山古墳に先行する中期古墳と考えられる。また谷を挟んだ朝日潟山1号墳は、当初前期の前方後方墳と考えられたが、市史考古編では中期の前方後円墳と見直された。

本ブロックでは中期から後期にかけて古墳が築造されたと思われるが、朝日寺山古墳群より優れた立地条件である丘陵の最高所が、公園として早くに開発されており、前期古墳がここに存在していた可能性が残る。

なお朝日坂尻古墳は、昭和30年頃南部中学校造成工事で消滅したと伝えられる円墳であり、関係者の証言や古地図から位置・規模・墳形を推定した。

7. 布勢湖周辺ブロック

古墳時代の布勢湖は、東西約3km、南北約2kmの広大な潟であったと考えられ、東側は砂嘴に沿ってさらに約2km、高岡市太田の方へ伸びていたと推定される。この布勢湖の西側部分に流れ込む仏生寺川・堀川などの河川流域の平野を見下ろす丘陵上に築かれた古墳を布勢湖周辺のブロックとする。なお本ブロックの古墳は最も谷奥に位置する慈領コツデラ古墳群を含めて、全ての古墳から上記範囲の布勢湖を臨むことができ、さらに布勢湖に接する平野を共有する立地といえる。このため各河川流域ごとに細分せず、布勢湖周辺の古墳として括した。円墳49基、方墳12基、前方後円墳1基、前方後方墳1基の計63基からなる。

本ブロックで発掘された古墳は慈領1号墳（慈領占墳）である。戦前の開墾で須恵器や鉄刀が出土し、その後昭和38年の調査で隕床の埋葬施設が確認され、鉄刀・刀子・玉類が出土した。6世紀後半の築造と考えられる。

前期から後期までほぼ継続して古墳が築かれたと推定されるが、特に後期においては一边26~28.5mと地域では類例のない規模の方墳である埴山ナンマイダ松1号墳が注目される。

8. 小竹川流域ブロック

小竹川は二上山丘陵の鉢伏山（178m）西斜面を水源とし、古墳時代には布勢湖東側に注いでいたと考えられる河川である。左岸の平野を見下ろす丘陵上に古墳が築かれている。円墳1基、方墳2基、前方後方墳1基の計4基からなる。

本ブロックでは早くから丘陵部が土砂採取などの開発を受けており、消滅した古墳の存在が推測される。例えば縄文時代の遺跡として知られる四十塚遺跡は、その地名や古墳時代の土師器が若干出土していることから古墳の存在していた可能性がある。

しかし分布調査では残存する丘陵上にはほとんど古墳は確認されておらず、分布の希薄な地域と考えられ、時期も今のところ前期のみと推定される。

c : 氷見市内の古墳の特徴

市内389基の古墳を墳形別にみてみると、円墳241基、方墳123基、前方後円墳14基、前方後方墳9基、帆立貝形古墳2基となり、円墳が全体の62%を占める。

次に古墳の立地上の特徴をみるために平野と古墳との比高差の平均を求めると、古墳全体では33.5mになる。上庄川流域に比高差100mを越える古墳が数例あるものの、ブロックごとの平均をみても特に突出した例ではなく、氷見市内の古墳の多くは平野や海・潟に面した丘陵上に築かれる傾向にあったといえる。

さらに各古墳の全長の和を古墳数で割って平均規模を求めると、古墳全体では13.3mになった。ブロックごとにみると、柳田布尾山古墳があるために37.6mと数値の大きくなる小竹川流域を除くと、朝日山丘陵が25.6mであり突出した規模となる。このブロックには数に対して比較的大型の古墳が築かれたといえる。

さて、これら氷見市域の古墳の特徴としては、まず上庄川流域に市内の古墳の47%にあたる数多くの古墳が存在することが注目される。上庄川は氷見市内で最も流域が広く、中流には安定した平野が広がる地域であり、古墳はこの平野を臨む丘陵上に広く分布している。上庄川流域は、古代や近世に能登と越中を結ぶ公的な街道が通ったように、交通の重要なルートにあたるという側面があるが、本ブロックの古墳分布は、まずこの地域の農業生産力の高さ、安定性を物語るものといえよう。なお、ここは地型や分布の状況から6つほどのブロックに細分できる可能性があり、複数の小集団が存在したものと推定される。

また上庄川流域より平野は狭いものの、宇波川・阿尾川・余川川各流域ブロックの古墳も同様の立地と考えられ、これらの谷にもそれぞれ農業を主体とした小集団が存在していたと考えたい。さらに布勢湖周辺としたブロックも、古墳が分布するのは湖周辺ではなく、むしろそこから奥に入った谷沿いの地域であり、このブロックの集団も同様であろう。

これら平野を見下ろすブロックの古墳数は、市内古墳全体の81%にあたり、氷見地域の古墳の多くは、農業生産を主体としていた集団によって築かれたといえる。

これに対して残りの加納潟周辺・朝日山丘陵両ブロックは平野が少なく、むしろ潟や海を介した交易や漁獲などを主体とした海人の性格を有した集団による築造と考えたい。⁽¹⁾

このうち加納潟周辺の古墳は、布勢潟周辺とともに上庄川流域に次いで古墳の分布が多いが、布勢潟周辺よりも密度が濃く、しかも前方部をもつ古墳が10基確認されている。また朝日山丘陵は数は少ないものの、比較的大規模の大きな古墳が築かれている。従って、富山湾や加納潟を見下ろす地域には、密度が濃く古墳が築かれ、しかも特徴的な墳形や規模の大きい古墳が多い傾向にあったといえる。

次に、時期や内容については不確定な要素があるが、氷見地域における首長墓の変遷を推定すると、阿尾島田A1号墳（前期前半、全長約70mの前方後円墳、加納潟周辺）→+→稻積オオヤチA1号墳（中期前半、全長47.5mの帆立貝形古墳、加納潟周辺）→泉1号墳（中期後半、直径45mの円墳、上庄川流域）→朝日長山古墳（後期前半、全長約43mの前方後円墳、朝日山丘陵）→堀田ナンマイダ松1号墳（後期後半、全長27mの方墳、布勢潟周辺）となり、古墳時代終末期には加納潟周辺に88基以上と推定される加納横穴群が営まれる。

これらを総合すると、氷見地域には平野を基盤とした農業主体の集団と、海・潟を基盤とした海人の性格の集団があり、前者の方が数多くの古墳を築造しているが、規模の大きい古墳や前方部をもつ特徴的な古墳は後者によって築かれることが多かったといえる。氷見地域の各集団をまとめた首長は、海人集団側であることが多かったようである。しかし地域の首長墓の変遷をみると、一時的に内陸部へ移動することもあり、この傾向は古墳時代を通して一貫したものではなかった。

d：柳田布尾山古墳の位置

以上、氷見地域における古墳の傾向を述べてきたが、それでは地域最大の古墳である柳田布尾山古墳はどのように評価できるであろうか。

柳田布尾山古墳は、その規模が地域では他に例をみない大規模なものであること、便宜上小竹川流域ブロックとしたものの、その周辺にはほとんど古墳が築かれることはなく、ほぼ独立した立地といえること、を特徴とする。

従って柳田布尾山古墳は氷見地域の集団だけでその存立を考えることは難しく、氷見地域を主体とした富山湾周辺の集団が、より広域的にまとまって築造したものと考えたい。ただこのまとまりは、短期的、もしくは臨時のものであり、柳田布尾山古墳に匹敵する規模をもつ古墳は富山湾周辺地域にその後築かれることはなかった。

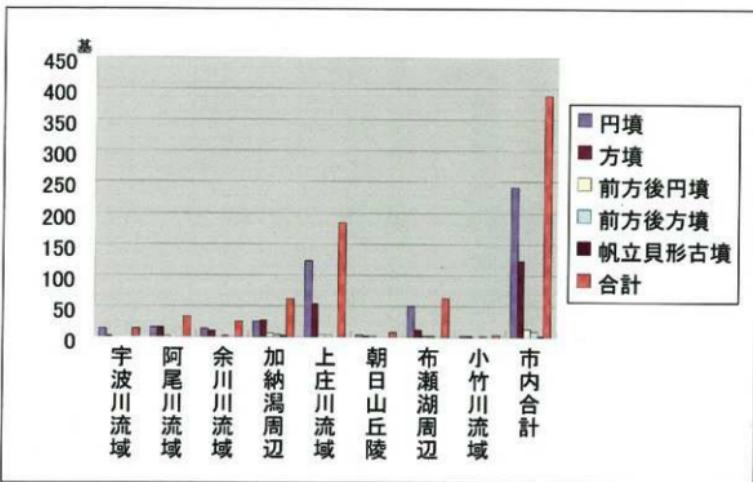
e：おわりに

古墳の分布状況から、古墳時代の氷見地域の様子を概観してみた。

古墳の築造については地域だけではなく、大和政権とのかかわりの中で考察すべき点も多い。また氷見地域ではほとんど未解明である集落の様相や、古墳時代後期に確実に存在する須恵器生産・塩生産にも踏みこめなかった。これらは今後の課題として残っている。

注

- (1) 加納潟周辺ブロックの拠点となる集落は今のところ不明であるが、朝日山丘陵ブロックの拠点となる集落としては朝日貝塚があげられる。



第14図 氷見地域古墳集計

	円墳	方墳	前方後円墳	前方後方墳	帆立貝形古墳	古墳数計	比高平均	総 規 模	規模平均
宇波川流域	13	1	0	0	0	14	26.8	224	16
阿尾川流域	15	15	2	0	0	32	35.5	422	13.2
余川川流域	13	10	0	1	0	24	39.5	266.3	11.1
加納湯周辺	25	27	5	3	2	62	37.3	923.7	14.9
上庄川流域	122	54	4	3	0	183	40.7	2261	12.4
朝日山丘陵	3	2	2	0	0	7	22.7	179	25.6
布瀬湖周辺	49	12	1	1	0	63	32.4	728.3	11.6
小竹川流域	1	2	0	1	0	4	33	150.5	37.6
合計	241	123	14	9	2	389	33.5	5154.8	13.3

第6表 氷見地域古墳集計表

参考文献

- 富山県立水見高校歴史クラブ 1950 『富山県水見地方横穴古墳調査報告書』
- 富山県立水見高校歴史クラブ 1952 『朝日長山古墳発掘調査報告書』
- 富山県立水見高校歴史クラブ 1964 『富山県水見地方考古学遺跡と遺物』
- 富山考古学会 1999 『富山平野の出現期古墳』
- 富山大学人文学部考古学研究室 2002 『阿尾島田A1号墳』第1次・第2次発掘調査報告書一
- 水見市 1999 『水見市史』9 資料編七 自然環境
- 水見市 2002 『水見市史』7 資料編五 考古
- 水見市教育委員会 1973 『富山県水見市朝日長山古墳調査報告書』
- 水見市教育委員会 1988 『富山県水見市堀田西谷内遺跡試掘調査報告書』
- 水見市教育委員会 1993 『水見市遺跡地図』(第2版) 水見市埋蔵文化財調査報告第14冊
- 水見市教育委員会 2000 『柳田布尾山古墳』第1次・第2次発掘調査の成果 水見市埋蔵文化財調査報告第29冊
- 水見市教育委員会 2001 『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) I』 水見市埋蔵文化財調査報告第32冊
- 水見市教育委員会 2001 『柳田布尾山古墳』第3次調査の成果 水見市埋蔵文化財調査報告第33冊
- 水見市教育委員会 2002 『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) II』 水見市埋蔵文化財調査報告第35冊

堀田ナンマイダ松古墳群1号墳における地中レーダ探査

岸田 徹（富山大学人文学院理工学研究科）

酒井英男（富山大学理学部）

はじめに

堀田ナンマイダ松古墳群は富山県氷見市堀田地内に所在し、複雑に入り組む谷に向かって、北西から南東方向に伸びる丘陵上に立地する。標高41~46mの丘陵南縁に1基の古墳が確認されている。

今回探査を行った1号墳は、堀田ナンマイダ松古墳群中において最大の規模をほこる方墳である。墳丘は3段築成であり、墳丘の北東側と南東側には区画溝が存在する。各段は四角形の形状であり、基底部は一辺約28m、中段裾と最上段裾の一辺はそれぞれ13.5mと7m、墳頂平坦部では約4m四方となっている。また、北西側には幅1mの火葬式の平坦面が存在し、墳丘高は、北西側と南西側では約5m、北東側と南東側では約3mとなっている。特に区画溝は、南東側で底幅3.7mを測る大規模なものである。

古墳の築造時期については現在のところ不明であるが、規模、立地、形状から、終末期古墳と推定されている。

探査の概要

本古墳には横穴式石室が存在する可能性があり、非破壊で地下の様子を探る地中レーダ探査により、その存在を確認することを主な目的として調査を行った。

探査は、2003年4月23、24日の2日間にわたって実施した。使用した装置は富山大学理学部所有のカナダ Sensor & Software 社製 PulseEKKO IV であり、アンテナ周波数は200MHzに設定した。また、深度の情報を正確にするため、地中でのレーダ波伝播速度を求める CMP 探査を併用した。その結果、当該地での伝播速度は0.064m/nsと推定され、この速度を用いて探査結果を解析した。

設定した探査測線を図1に示す。測線の設定において、墳頂中心を探査原点(0,0)とし、東をY軸、南をX軸とした。尚、立木やブッシュ等の影響で等間隔に探査グリッドを設定できず、測線の間隔は一定になっていない。

探査結果

各測線における探査結果を図1~4に示している。各図において、横軸は探査原点(0,0)を基準(0 m)とした走査距離をとっている。縦軸については、右側にはレーダ波が反射し帰ってくるまでの時間(単位:ns)を取り、左の軸ではレーダ波の伝播速度を基準として計算した絶対高(単位:m)を表している。

(1)南北測線における探査結果

① LINE11(墳頂原点(0,0)上を通り、南北方向に設定した測線)

距離0.2~2mの領域において、深さ約1.6mに異常な応答が認められる。また、距離3~5m(標高約47.7m)の範囲に、土層の境界を示す水平構造が見られる。これは墳丘2段目上面の標高とはほぼ一致することから、3段目と2段目の盛土の質の違いを捉えたものと解釈できる。これと同じような構造は、距離-9~-5m(標高約45.2m)と距離7~8.5m(標高約45.3)の領域にも表れている。これらも同様に、1段目と2段目の盛土の違いを捉えたものと判断した。

② LINE12(探査原点より西に2.5mの地点を南北に横切る測線)

同測線では、明確な異常応答や上層構造は見られなかった。

③ LINE13（探査原点より北に2.5mの地点を南北に横切る測線）

距離0.5~2.4mの領域に異常応答が認められた。しかし応答は弱く、石室を捉えたものとは考えにくい。

(2)東西測線における探査結果

図3に、LINE 1~6の結果を示している。

① LINE 1（原点より8m北側を東西に横切る測線）

距離0~−2.5m付近に異常を示す応答が認められる。深さ約1.2~2mにわたる大きな応答であるが、同測線の1.5m南側を通るLINE 2では異常は現れず、Line 1の応答は石室を捉えたものとは考えにくい。応答の原因は、今のところ不明である。

② LINE 2（原点より6.5m北側を東西に横切る測線）

距離6~3.5m付近（標高約45.2m）に、南北測線のLINE11と同様に、1段目と2段日の盛土の境界を示唆する構造が認められた。

③ LINE 3（原点より3m北側を東西に横切る測線）

距離2~−0.5mと−3~−5.5m地点の2箇所に異常が認められる。その2つの異常の間に、座んだ構造も見て取れる。西側の異常（図の右側）は斜面の肩部にあたり、地形に起因する擬似応答の可能性もあるが、東側（左側）の異常応答は地形の影響ではなく、何らかの遺構を表していると考える。

④ LINE 4（原点より1m北側を東西に横切る測線）

距離8.5~6.5m（標高約45.2m）と距離3~1.5m（標高約47.3m）の領域に、土層の境界を示す構造がある。これは2段目と1段目の盛土の境界を捉えたものと考えられる。また若干弱い応答ではあるが、距離1.5~−1m領域にも異常が認められる。

⑤ LINE 5（原点上を東西に横切る測線）

距離9~5m（標高約45.5m）、4~2m（標高約47.3m）、−2~−4.5m（標高約47.3m）の範囲に、段築の境界を示す応答が表れていた。また、墳頂部の距離2~−1.5mの領域にも異常が認められる。

⑥ LINE 6（原点より1m南側を東西に横切る測線）

距離9~6m（標高約45.4m）、4~2m（標高約47.2m）の範囲に土層の境界を示す構造が認められた。また墳頂部の距離1.5~−2mにかけて異常があるが、距離0.2~−1.2mの範囲は立木のためデータが取れず、全体像は把握できなかった。

図4には、LINE 7~10の結果を示している。

⑦ LINE 7（原点より2m南側を東西に横切る測線）

距離4.2~2.2m（標高約47.2m）に段築構造を示す応答が得られた。また墳頂部の2.2~−3mの広い範囲にも異常がある。

⑧ LINE 8（原点より4m南側を東西に横切る測線）

距離8.5~5.2m（標高約45.3m）に段築構造が捉えられている。距離0~−2.8mの領域にも異常な応答がある。

⑨ LINE 9 (原点より 6 m 南側を東西に横切る測線)

距離 8~5.2m (標高約45.3m) 付近に段築構造が確認できた。また、距離0.5~2 m の範囲に異常応答が確認できる。

⑩ LINE10 (原点より 8 m 南側を東西に横切る測線)

距離 2~4.5m (標高約45.3m) の範囲に土層の境界線が見られる。また、距離9.8~8 m (標高約43.2m) と距離-6.8~-9.4m (標高約43.8m) にも同じ水平構造が見て取れる。この二つの上層構造は、深度が深く古墳の段築構造とは考えられない。地山層中の上層の違いを捉えた応答であると推測した。

考察

以上の地中レーダ探査の結果から、本古墳の墳丘構造および埋葬施設について、推察を行う。

1) 墳丘構造

複数の測線において、各段築単位の盛土境界を示す構造が示されている。この結果は、本古墳は後世に削平等を受けて三段築となっているのではなく、段を意識して盛土されていることを示すと考えられる。しかし、それが古墳築造時に行われた盛土であるか、後世に改築されたものかは探査結果からは判断が難しい。今後の発掘調査が期待されるが、探査からは、本古墳の殆どは盛土により構築されていることは確実であると結論する。

2) 埋葬施設

多くの測線において異常応答が認められた。図5は各測線の異常な応答の領域を測量図にプロットしている。この図を見ると、墳丘中央部に異常が集中しており、墳頂部に何らかの遺構や埋葬施設が存在する可能性が高い。この異常応答は南北方向に伸びる傾向があり、埋葬施設は南北に長軸があると考えられる。その深度は、異常応答から見て、墳頂部より 1~3 mまでの範囲にある。

本古墳では、埋葬施設として横穴式石室の存在が予想されたが、今回の探査で得たレーダ波の応答は石室による応答としては弱いので石室の有無を明確に判断することは難しいと思われる。

おわりに

今回の探査地域は、立木や3段築成の墳丘形状によるガケ面も多く、探査結果への影響も懸念されたが、墳丘構造と埋葬施設について、良好なデータを得ることができた。当初の目的とした横穴式石室の存在については、石室を示唆するレーダ波の応答は現れているものの、その応答の強さは石室にしては弱い。今回の探査結果だけで石室の存在を結論することは危険であると思われ、今後、他の探査法も組み合わせ、また簡便なトレンチやピットなどによる調査も行われることが望まれる。

謝辞

水見市教育委員会の方々には探査の便宜を図っていただき、当古墳について色々とご教授いただき、また探査に当たって富山大学理学部地球科学科と人文学部考古学研究室の学生の協力をいただき、御礼申し上げます。

参考文献

Annan,A.P. and Cosway, S.W. : Ground penetrating radar survey desing, Annual meeting of SAGEEP, 1-12, 1992

酒井英男、小島信人、宇野隆夫、田中保士、アダム・オニール、上坂麻子、佐藤朗、「岐阜県養老町象鼻山1号前方後方墳の電気探査—地下レーダ探査と高密度電気探査—」、『象鼻山1号古墳』、富山大学人文学部考古学研究室、103-116、1998。

中埜貴元、酒井英男、「地中レーダ探査による柳田布尾山古墳の構造の研究」、『柳田布尾山古墳 第3次調査の成果』(氷見市埋蔵文化財発掘調査報告第33冊)、氷見市教育委員会、38-55、2001。

岸田徹、酒井英男、「阿尾島田A1号墳におけるレーダ探査」、『阿尾島田A1号墳—第1次・第2次発掘調査報告書—』、富山大学人文学部考古学研究室、26-30、2002。

<図の説明>

図1：地中レーダ探査の測線配置図

図2：地中レーダ探査結果1（南北測線）

図3：地中レーダ探査結果2（東西測線）

図4-1：地中レーダ探査結果3（東西測線）

図4-2：地中レーダ探査結果4（東西測線）

図5：地中レーダ探査により異常が認められた部分

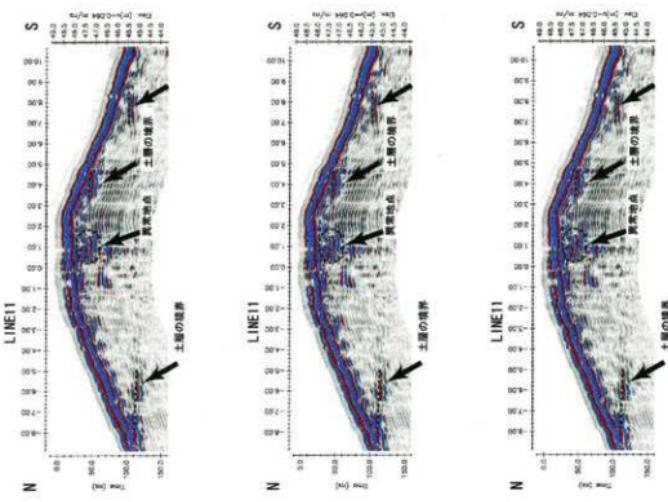


図2 地中レーダー探査結果1(南北側線)

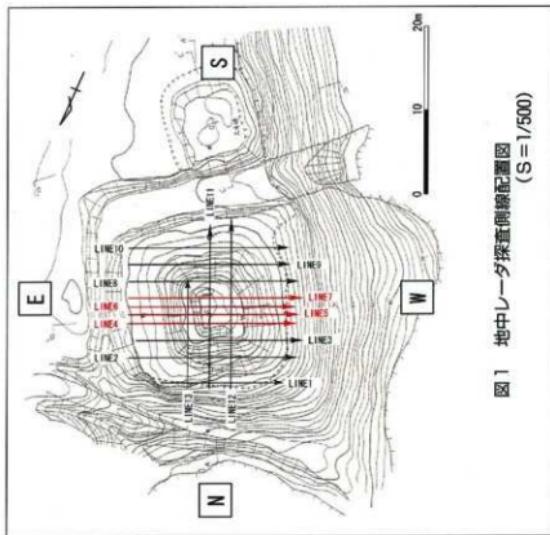
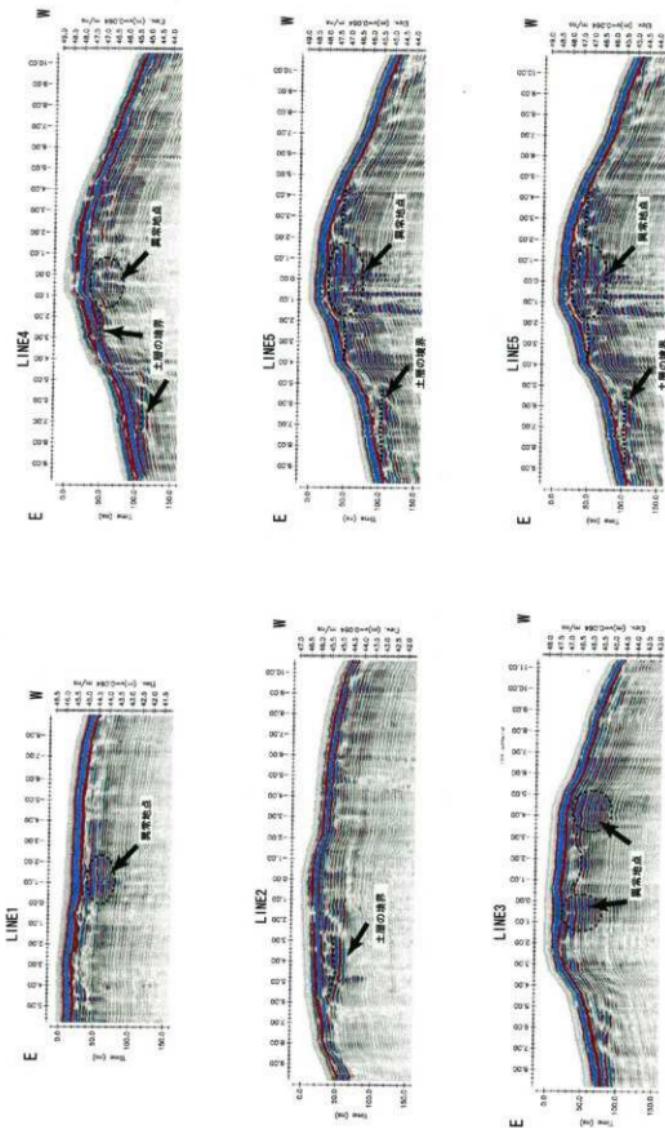


図1 地中レーダー探査側線配置図
(S=1/500)

図3 地中レーダ探査結果2（東西側線）



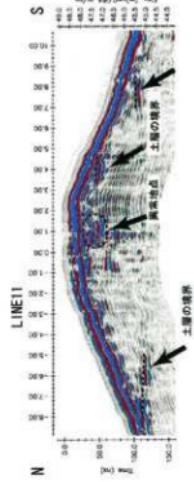
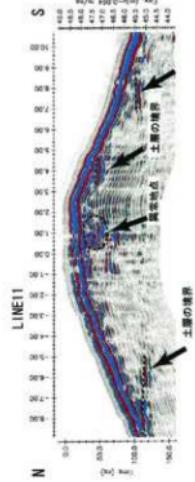
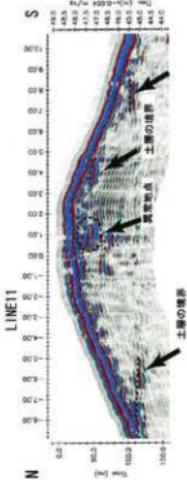


図4-1 地中レーダ探査結果3（東西側線）

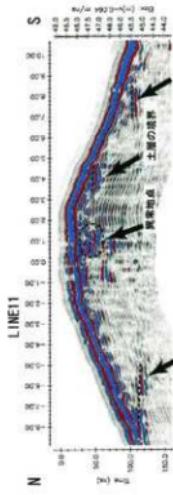


図4-2 地中レーダ探査結果4（東西側線）

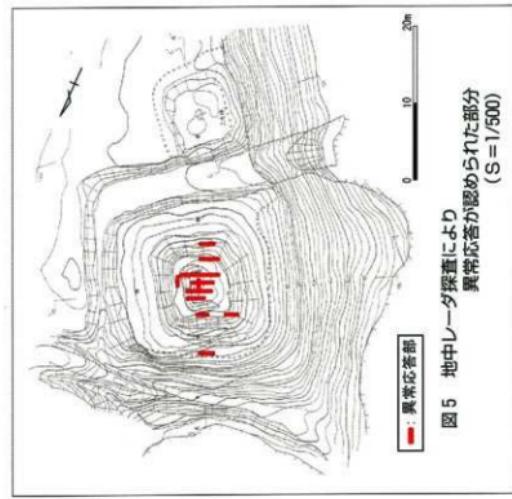


図5 地中レーダ探査により
異常応答部
(S = 1/500)

図 版





(1) 堀田ナンマイダ松 1号墳
北東側区画溝
(北から)



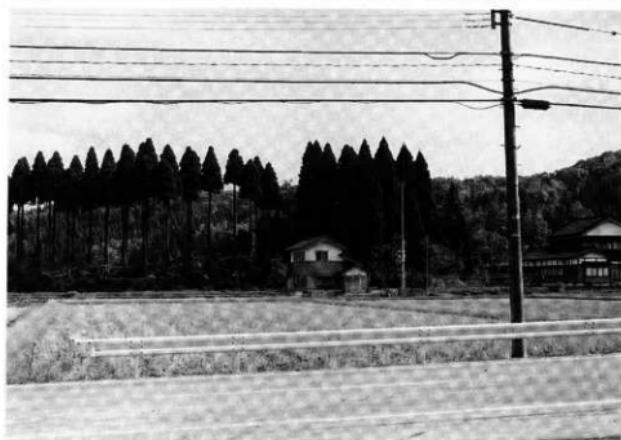
(2) 堀田ナンマイダ松 1号墳
南東側区画溝
(北東から)



(3) 堀田ナンマイダ松 2号墳
全景
(北東から)



(1)光西寺山古墳群遠景
(西から)



(2)慈領古墳群遠景
(西から)



(3)慈領コツデラ古墳群遠景
(北から)



(1)寺飯久保古墳群遠景
(東から)



(2)深原古墳群遠景
(東から)



(3)埴田ニキ塚山古墳群遠景
(北から)

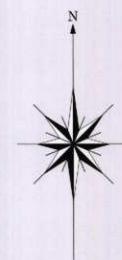
平成15年3月25日 印刷
平成15年3月31日 発行

水見市埋蔵文化財調査報告第39冊
水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅲ

編集・発行 水見市教育委員会
〒935-0016 富山県水見市本町4番9号
TEL 0766-71-8215 (生涯学習課)

印 刷 北日本印刷株式会社

氷見市内古墳分布図



▲石動山 564m

石川県

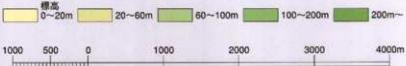
富山湾

高岡市

福岡町

青海

組越



標高 0~20m 20~60m 60~100m 100~200m 200m~

1000 500 0 1000 2000 3000 4000m

宇波川流域

- 1: 脇方十三塚古墳群
- 2: 脇方西古墳群
- 3: 宇波安居寺古墳群
- 4: 熊野神社古墳群
- 5: 宇波古墳群
- 6: 北八代中山古墳
- 7: 北八代古墳
- 8: 指崎北古墳群
- 9: 指崎向山古墳群
- 10: 指崎大谷古墳群
- 11: 榎横城ヶ峰古墳群

余川川流域

- 12: 余川金谷古墳群
- 13: 余川田地古墳群
- 14: 阿尾島田古墳群
- 15: 稲積才オヤチ古墳群
- 16: 稲積ウシロ古墳群
- 17: 加納蛭子山古墳群
- 18: 加納新池古墳群
- 19: 加納中程古墳群
- 20: 七分一古墳
- 21: 須引易古墳群

上庄川流域

- 22: 泉谷内口古墳群
- 23: 中尾喜城古墳群
- 24: 中尾躑躅古墳群
- 25: 中尾茅丘古墳群
- 26: 中尾神子谷内古墳
- 27: 中尾高坂古墳群
- 28: 泉古墳群
- 29: 柿谷上谷山古墳群
- 30: 柿谷石戸谷内古墳群
- 31: 上田古墳群
- 32: 中村栗屋古墳群
- 33: 中村天場山古墳
- 34: 上田西古墳

余川川流域

- 35: イヨダノヤマ古墳群
- 36: 谷屋浦出古墳群
- 37: 谷屋新堂出古墳
- 38: 新保城山古墳群
- 39: 新保古墳群
- 40: 速川神社古墳群
- 41: 田江白山社古墳群
- 42: 田江古墳群
- 43: 小久米古墳群
- 44: 田江古墳群
- 45: 田江古墳群
- 46: 田江古墳群
- 47: 久保古墳群
- 48: 触板古墳群
- 49: 触板清水古墳群
- 50: 塙谷山古墳
- 51: 朝日守寺山古墳群
- 52: 朝日長山古墳
- 53: 朝日坂尻古墳
- 54: 朝日湯山古墳群
- 55: 布施木本古墳群
- 56: 尾久保古墳
- 57: 大浦古墳群
- 58: 布勢湖古墳群
- 59: 深原古墳群
- 60: 寺飯久保古墳群
- 61: 惣領古墳群
- 62: 惣領コツテラ古墳群
- 63: 光西寺山古墳群
- 64: 堀田ニキ塚山古墳群
- 65: 堀田館ノ山古墳
- 66: 堀田館ノ山古墳群
- 67: 大浦三藏古墳群
- 68: 小竹川流域
- 69: 上田子古墳群

加納潟周辺

- 7: 北八代
- 8: 高瀬
- 9: 高瀬
- 10: 高瀬
- 11: 高瀬
- 12: 余川
- 13: 余川
- 14: 阿尾川
- 15: 阿尾川
- 16: 阿尾川
- 17: 阿尾川
- 18: 阿尾川
- 19: 阿尾川
- 20: 阿尾川
- 21: 阿尾川
- 22: 阿尾川
- 23: 阿尾川
- 24: 阿尾川
- 25: 阿尾川
- 26: 阿尾川
- 27: 阿尾川
- 28: 阿尾川
- 29: 阿尾川
- 30: 阿尾川
- 31: 阿尾川
- 32: 阿尾川
- 33: 阿尾川
- 34: 阿尾川
- 35: 阿尾川
- 36: 阿尾川
- 37: 阿尾川
- 38: 阿尾川
- 39: 阿尾川
- 40: 阿尾川
- 41: 阿尾川
- 42: 阿尾川
- 43: 阿尾川
- 44: 阿尾川
- 45: 阿尾川
- 46: 阿尾川
- 47: 阿尾川
- 48: 阿尾川
- 49: 阿尾川
- 50: 阿尾川
- 51: 阿尾川
- 52: 阿尾川
- 53: 阿尾川
- 54: 阿尾川
- 55: 阿尾川
- 56: 阿尾川
- 57: 阿尾川
- 58: 阿尾川

朝日山丘陵

- 60: 寺飯久保古墳群
- 61: 惣領古墳群
- 62: 惣領コツテラ古墳群
- 63: 光西寺山古墳群
- 64: 堀田ニキ塚山古墳群
- 65: 堀田館ノ山古墳
- 66: 堀田館ノ山古墳群
- 67: 大浦三藏古墳群
- 68: 柳田布尾山古墳群
- 69: 上田子古墳群

朝日山丘陵

- 60: 寺飯久保古墳群
- 61: 惣領古墳群
- 62: 惣領コツテラ古墳群
- 63: 光西寺山古墳群
- 64: 堀田ニキ塚山古墳群
- 65: 堀田館ノ山古墳
- 66: 堀田館ノ山古墳群
- 67: 大浦三藏古墳群
- 68: 柳田布尾山古墳群
- 69: 上田子古墳群